日中おかやま
題字故原田親
No. 840
2017/9/25
日中友好新聞
発行所
日本中国友好協会
日中友好協会
岡山支部
〒703-8256
岡山市浜3-8-30-514
TEL(086)272-3010
郵便振替口座
01250-0-3835
日中友好協会
倉敷支部
〒713-8014
倉敷市連島中央1-8-4
(宮地方)
TEL・FAX(086)446-2711

2018年カレンダー

「中国悠久の旅」の販売、まもなく開始

2018年の日中カレンダー販売が、まもなく始まります。このカレンダーは、中国の歴史・文化遺産、少数民族の服装などでつくられています。

今年の特徴は、少数民族を題材にしたものが多いことです。(雲南省の大理・三月街祭＝白族、貴州省のミャオ族の歓迎式など)今年の7月中旬に訪れた黒竜江省の八女投江烈士陵園」が含まれています。

2003年の岡山支部は、次の目標を掲げて、販売を始めました。

一、中国残留孤児」訴訟支援の一環として取り組む。

二、日中の財政に寄与する。

三、中国に対する正しい理解を広げる。

2006年には、県下で700部を販売するなど、中国への関心を高め、孤児」訴訟の世論づくりにも大きく貢献しました。

しかし、近年は歴史認識」領有権」問題をめぐる日中双方のマスコミの影響もあり、日中関係は悪化し、販売活動は厳しい状況にあります。

今年は360部(岡山250、倉敷110)の目標を立てました。9月下旬には現物が到着します。左記の連絡先にお申込みください。

一部1200円です。(同封の申込用紙を活用してください)

八女投江烈士陵園にて

カレンダー購入の申し込み先

☆ 日中友好協会　岡山支部
電・FAX　086－277－2470（小林軍治）

☆ 日中友好協会　倉敷支部
電・FAX　086－455－7800（太漏澄夫）

☆ 総社日本語教室　事務局
電・FAX　0866－99－2560（西森文子）

戦争体験をどう次世代に伝えるか

8月7日、岡山駅西口の「又来軒」で2017年中国東北部を訪ね、日中友好を促進する旅」に参加した9人が懇親会を開いた。参加者は、それぞれが撮った写真をお互いに交換しながら、旅の思い出を楽しく語り合った。

この旅については、山陽新聞の7月30日付に高見さん(山陽新聞の記者)が、8月6日付に青木さん(近現代史研究家)が、それぞれ記事を載せている。懇親会の話題も記事の内容が中心となった。両者の記事に共通する内容は消えゆく戦争の記憶と遺産」を、どう継承していくかである。

高見さんは、私の発言私たちが戦争を生で体験した最後の世代。その悲惨さを語り継ぐとともに、中国の人たちとの交流を次世代に引き継ぐことができれば」を引用して、地元民との交流を次世代へ」引き継ぐことの大切さを強調している。

青木さんは、地元住民との交流会で出された戦争の不幸な歴史があったが、ともに交流していきましょう。われわれは平和を愛する」との発言をもとに、戦争の悲惨さを知ることも重要だが、お互い知りあい、生身の人間として交流しあって平和の大切さを確認することだ」と提言している。

参加者全員が、歴史を共有し、交流を促進する」ことの大切さを感じた。また機会があれば参加したい。そのときは、残留婦人および残留孤児」の二世・三世と一緒に訪れたい。

日中岡山支部
小林軍治

生まれ故郷に、ことしも行ってきました

竹内和夫

東京は城東区(現江東区)亀戸五丁目に生まれました。小さいころ、この赤門でよく遊んだものです。四丁目の赤門は、もちろん、一九四五年三月十日の東京大空襲で焼けおち、わが家とともに灰になりました。一九二三年九月、関東大震災の混乱時に殺害された青年労働者一〇人の慰霊祭に今年も参列しました。その亀戸事件も94周年をむかえました。

ことしは小池都知事が、朝鮮人犠牲者への追悼文を取りやめたことで、いくつもの団体から批判があいつぎました。

写真は例年の石川島重工労働者合唱団とともにうたった参列者の姿です。

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhong.biz/
メールアドレス
rizhong86@hotmail.co.jp

中国東北部を訪ねて日中友好を促進する旅　三日目

犬飼　繁

「中国東北部を訪ね日中友好を促進する旅」３日目の報告です。

今日は林口市から牡丹江を経て哈爾浜(ハルビン)に至る約３００キロをひたすら移動する１日です。出発の前、ホテルの近くを散歩しようと玄関に出てみると、今日はホテルで結婚式があるということで花で飾られた新郎の車を発見。これから新婦を迎えに行くそうです。近くの広場では早朝から孔子像の下で音楽に合わせて踊っている人々を見かけました。去年行った洛陽でも同じような光景を目にしました。狭い道沿いにたくさんの露店も出ていました。

林口市から昨日訪ねた龍爪開拓団跡地を通り、牡丹江へ向かいますが、小林先生など当時の龍爪開拓団の人々が避難したルートをバスでたどっていくことにしました。小林先生の母親は臨月の身で避難したのですが、関東軍が待っているはずの場所まで来て関東軍が住民を見捨ててさっさと逃げたことに強い憤りを覚えたそうです。途中、ヤギや羊を連れた人と出会ったり、山の稜線に風力発電の風車を発見しました。そういえば、昨日は風車と太陽光発電の街頭を見たし、夕べ泊まったホテルには太陽光パネルが設置されていました。アメリカはパリ協定を離脱しましたが、中国は自然エネルギーの開発に取り組んでいる様子がうかがえました。牡丹江から高速道路でハルビンに向かいましたが、高速鉄道の建設が進んでいて、来年の12月には開通するとのことでした。それにしても中国における高速鉄道建設のスピードには目を見張るものがあります。ハルビンに着くと市のシンボル的な建築であるロシア正教の聖ソフィア聖堂を見ました。さらに松花江、女性漫画家としてその先駆となった上田とし子さんにとって、松花江は忘れられない存在だったそうです。松花江の治水工事の成功を記念してつくられたスターリン広場も訪れました。中ソ対立前の、両国関係が良好な時代を思い起こさせる場所でした。

ロシア正教の聖ソフィア聖堂

太極拳講習会第88期修了式

9月６日（水）修了式 を行いました。

第88期は６ 名の方に修了証書を授与。

皆さん、日々練習に励まれこの日を迎えられました。

皆勤賞は ３ 名。 修了式後は、“よいきげん”にて食事会。岡山教室、西大寺教室の交流の場となり楽しく話も弾み、料理も美味しくいただきました。

第89期も、頑張って練習に励みます。

井上みどり

第１１回「孟子」を読む

尽心篇（下）

弓田　盛樹

最終章で孟子は荒んだ時代に正しい道徳を伝える自身の使命感を謳いあげ、「孔子から現代に至るまで、百余年。私が生まれた鄒（すう）は、魯（孔子の生地）からこんなにも近いところにある。それなら私が孔子の教えについて伝え聞いたことを残さなければ、後世に聖人の道を聞いて知る者はいなくなってしまう」と危機感を募らせます。

孟子の生きた時代はまさに乱世ともいうべきで、それまで当たり前とされてきた価値観が通用しなくなり、人々の考えが多様化していた時代です。その中で、諸子百家と言われるように様々な思想家が出現しました。

堯・舜・湯王・文王までそれぞれ５００年の間隔がある（五百年循環史観）と孟子は主張しますが、現代の視線で考えれば５００年も間が空いてしまう歴史から一つの思想を抽出するというのは主観的すぎます。

しかし、この時孟子が最も危機に感じたのは儒家の教えが途絶えてしまうことで、継承者の必要性を訴えているのです。ひとたび失われてしまった文化は再現できたとしても復興するのは不可能です。それと同じように、いったん途絶えた思想を復活させることも大変困難なことなのです。孟子は聖人の歴史の中から儒教の文化性を見出しているのだと思います。

孟子の説く道徳というのは「目上の言うことは絶対」「家族は助け合わないといけない」「国を愛するべきである」というような封建主義的なものとは明らかに違っています。民衆のために国家があるのだから君主たるべきものは高い道徳性を身につけていなくてはいけないというものです。

道徳とは個々人の判断基準であり、生活実態です。そこから文化が誕生していきます。日本は文化水準が低いとよく言われます。その背景には、個人の生活実態が考えられていないという問題があるのです。

おわり

次回の新聞発送作業は
10月2日(月)午後1時半から
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

石川
小川
小林
竹内和
竹内袈